

花づくり

*看板、御旗、マンド、小若等の花を作成するのは相当の時間が費やされる



*型で花の紙をかたどる



*花の貼り付け作業



*花の色は南組が上から青、赤、黄、白、緑の五色(北組は青、赤、黄、緑、白の五色)



マンドを上げる

*花の出来上がりを待ちマンドに取り付ける(中心は真っ直ぐに他は斜めに開き気味に取り付ると格好よく見えるとか)



御旗を建てる

*南北両組揃い一斉に御旗を建てる（年番は吉谷神社と赤門向かって右側、非年番は浜宮様と赤門向かって左側、南組は岡山ガソリンスタンドと朝日屋前、甘晴堂前）



*後継者は大丈夫無事育っている？



*重機が使えなければ人界戦術でガソレ



*神社前にはためく御旗



小宿の役付けの発表とかための盃

*小宿関係者全員整列着座し進行役より宿六の紹介に始まり役付けの発表へ



役付けの発表は若者頭→歌頭→振付頭→若者頭補佐→歌世話人→世話人→振付→振付見習



踊子の順にて終了後、かための盃は宿六→若者頭→歌頭→振付頭にてその後若者頭の音頭



に引き続き「めでたきもの」→「今の十七」→『八幡崎』が出て役付けの発表ならびにか



ための杯の儀は無事

小宿の役付けの発表とかための盃



役付け報告

*小宿役付け発表後大宿へ報告



*緊張の中、大宿のマドをくぐる



*玄関上がり端で出迎え



*報告受け体制にて



*若者頭→歌頭→振付頭の順にて報告



*祭頭に始まり監督で総代の報告



役付け報告

* 盃は祭頭(総代を代表して)→若者頭→歌頭→振付頭の順で(ホウはカア)



* 「めでたく報告の儀」終了にて簡単な酒宴が行われる



* 無事に報告終了し宿に戻り一安心



小宿の見聞

* 緊張の中、小宿に入る



* お茶は飲んでも菓子手出すべからず



* 若者頭と振付頭の見聞の挨拶



* 歌の見聞



* 歌の見聞後の挨拶次は踊りの見聞だ



小宿の見聞

* 大勢の観衆の中踊りの見聞開始



* 見聞の状況は振付頭より踊子へ伝達される



* 見聞無事終了五人衆は満足気に小宿をあとにする



大宿の面談

*いざ大宿へ



*今や遅しと待ち受ける総代



*面談のため総代に挨拶する若者頭



*後部に着座する若者頭



*見聞開始



大宿の面談

*見聞終了の挨拶する三頭



*無事終了意気揚々と引き上げる踊子達



出合い式の練習



1 月 1 5 日

赤門の検分

(往路)

8 時 00 分 踊り子小宿集合
9 時 25 分 神子宿発(年番)
9 時 30 分 小宿着
9 時 58 分 小宿発
10 時 00 分 大宿着
(一つ馴らしで踊る)
10 時 55 分 大宿発
11 時 05 分
甘晴堂前出会式
11 時 15 分
11 時 25 分 赤門着
11 時 50 分 赤門の検分
(年番より踊り始める)
(所望なしの一発勝負)

(復路)

13 時 05 分 赤門発
13 時 15 分
甘晴堂前別れ式
13 時 25 分
13 時 35 分 大宿着
13 時 40 分 大宿発
13 時 55 分 (神子は神子宿へ)(年番)
13 時 45 分 小宿着
(昼食休憩等)
14 時 45 分 小宿発
14 時 50 分 大宿着
(大宿の庭を借り練習)
16 時 00 分 大宿発
16 時 05 分 小宿着
(休憩、夕食等)
17 時 00 分
(夕食等のあとかたづけ)
17 時 30 分
(再び練)
21 時 00 分 あとかたづけ
21 時 30 分 解散

祭礼の進行については年番の監督が責任を負い、非年番の監督はその補佐、補助としてその任に当たる

彼方此方デデモンストレーション

*つばきやの駐車場、長田の駐車場、朝日屋の空地デモンストレーション宣伝効果大なり



出会式

* 出会い式のため小宿を出発



* 気合の入った踊子の面々



* 看板を先頭にいざ戦いの場に行かん



* 出会い式の場に歩を進める



* 出会い式の場に歩を進める



* 年番の目玉の着飾った「神子」



出会式

* 南北警護の出会い式「揃ったぞー」の声も



* 出会い式を終え祭頭、責任役員との挨拶の体制へと移動、整列する警護と看板



* 祭頭等との挨拶



* いざ赤門へ



* 緊張の中整然と行進する南北警護



赤門の検分

*年番の「神子舞」



*年番の「かんちよろ節」



*非年番の「鹿島様」



*警護の交代式



1月16日

吉谷神社に奉納する

(往路)	(復路)
7時00分 踊り子小宿集合	15時00分 神社発
8時25分 神子宿発	16時30分 赤門着 (赤門での盃事)
8時50分 小宿発	17時00分 赤門発
8時55分 大宿着 (一つ馴らしで踊る)	17時15分 神社着 (神輿を納める)
10時00分 大宿発	17時50分 神社発
10時10分	18時00分
甘晴堂前出会式	甘晴堂前別れ式
10時20分	18時10分
10時30分 神社着	18時20分 大宿着
10時45分 奉納踊り開始 (年番より踊り始める) (原則として、所望は 二回として一踊り三回 となる)	18時25分 大宿発
12時20分	18時30分 小宿着 (夕食休憩等)
(交代で昼食)	19時50分 小宿発
12時30分 奉納踊り (非年番踊り始める)	19時00分 大宿着 (大宿礼祭)
14時00分 奉納踊り終了	20時30分 大宿発
(渡御式)	20時40分 小宿着
15時00分 渡御出発	(小宿礼祭)
	23時00分
	23時30分 解散

神社へ奉納

* 庁屋前での挨拶



* 庁屋内での祭頭と責任役員と杯事



* 警護の入場式



* 年番の看板の振り始め



* 年番の「神子舞」(赤門との衣装に注視)



神社へ奉納

* 警護の交代式



* 三進三退二礼



* 非年番看板振り始め



* 非年番看奉納時は祭頭も上座に



* 非年番看の「鹿島様」については歌頭一人にて



渡御前の奉納

* 神輿を下ろし所定の場所に



* 奉納踊りの最後の「鹿島様」については南北祭り関係者全員にて



渡御へ出発

*先払を先頭に整列した行列が町中を厳かに進行する



渡御へ出発



*以前はこのような光景がみられたものだが伝統を継承する人もこのおばあさんのみだ

神輿を納める



南北警護等別れ式

* 神輿を納め一連の神社行事は終了南北若い衆等は警護別れ式へ



* 南北警護別れ式



* 別れ式を見守る若い衆



* 南北警護別れ式終了後小宿関係者の別れの挨拶、音頭は年番の若者頭



* 安堵感に浸る三頭等



大宿と私

平成4年の祭りの際には、五人衆の一人とし総代としての神社の年中行事も行いつつ準備に取り掛かっていた。

それぞれの担当する役も決まりそれらの役作りのため日々研鑽を積んでいる中、突然母の悲報（平成3年12月29日没）を受けることとなった。

あと、半月も立てば祭りの本番、悲しさ重くのしかかってくるも、本日まで一緒に苦労した皆に申し訳ない気持ちもまた、重くのしかかってきた。

父は正月祭りがあるので葬儀を終了後まで延ばすこととした（今も判らないがそんな風習があったのだろう）私も慣例に従い五人衆を止めざるを得ない状況となった。

頭の中が真っ白となり多分、日毎つけていたメモも何処かに紛失してしまったのか、全く記憶の中にない。

小宿に関わっていても、大宿の動きが全く判らず本日まできている。今回は大宿経験者の諸氏のお話や記録を参照させていただき丸写しとなるかも知れないが書き綴ってみた。

幸いなことに我々兄弟二人、私は平成4年に中途半端ではあったが関わる事が出来たし、弟は平成11年に関わりそれなりに真っ当することができたと思っている。

兄弟二人曲がりなりにも大宿に関わったのは各種覚書等を拝見しても数少ない例ではないかと誇りに感じる。

大宿の動きが少しでも氏子の判っていただくことが出来れば、そして神秘の神子宿までもと思いつつ関係者への理解を得たいと思う毎日です

* 吉谷神社正月祭の由来

歴史的背景は各種書籍を読んで頂くこととしてもらい、それらの意味を理解することも難解かどうかは読んだ方におまかせすることとし簡略に記載してみた。

大島全島の総鎮守も三原山そのものを神体とする「三原大明神」であり、時折大噴火を起こし、その都度島内に大きな災害をもたらしてきたお山の神をいかに宥^{なだ}めるかが、島民の最大限の関心ごとであり、その祭礼には格段の配慮が求められたと推測する。

厳正な祭りを執行し、「お山」を宥め、また噴火を「御神火」と呼びそれらの災いから島民を守るため、神子舞や手踊りなど、長期間をかけた修練と、小宿の見聞、大宿の検分、赤門での面談等の厳格な審査を経て、謹んで災いの沈静化を望んで奉納に努め、今日まで脈々と続いている祭礼であろう。

* 氏子総代〔五人衆とも言う〕

南北の両組より選出された一組五人の氏子総代が選挙により選出されていたが、近年は前回の総代の推薦により決定されている。（雑談ではあるが、「神社からの頼まれごとについてはこれを断ってはならぬ」とか古老から聞いたことがある）

普段は神社の年中行事等に従事するが、こと祭りに関しては「五人衆」と呼ばれ、若い衆の推進力と協力仰ぎつつその運営の任にあたる。

祭頭 → 「祭り大将」あるいは「トシガシラ」とも呼ばれ、一般的には年長者を指定して祭礼の一切の責任を負う役
儀礼には紋付羽織袴の正装にて出席する。

会計 → 祭頭の補佐役であり社務所で責任役員の会計担当と一緒に会計の任に当たるとともに祭りの流れを記録し、次の祭りに役立てる任に当たる。

監督 → 別名「おんまわし」とも言われ祭礼の諸行事を監督し、流れを円滑に、かつ予定どおり進行させるなどの役割を担うため、祭りについて精通している人が望まれる。（あちらこちらと激しく動き回るので紋付でなく普通の羽織を着用する）

警護 → 総代の中から二名を選び（上席警護、次席警護）祭礼当日（15日の赤門の面談及び16日の神社奉納）は行事が始まったら紋付、羽織、袴、着物（年番は茶みじん、非年番は藍みじん）の正装に白扇を持ち、節目々における締めくくり役を負い行事の流れにより行動し、終始無言を貫き所作動作はきわめて厳正に行われも祭礼の花形である。

扇付 → 五人衆とは役を異にするが、警護役の二人を警護（警護に対する無礼や前面を通過するなどの行動に目を配るなどの役を負い、気の休まる暇なし）する。

気を使うが余りよい？役とはいえないが居なくてはならない役どころ。
又、警護の扇付きとは別に年番は「神子舞」を受け持つので、踊りの

所作の補助及び行列における補助等とこれまた大切な任の役を負う
(二名)

元来小宿の任において配慮すべき役であったが、それらの重要性から各宿にて対処すべきものとするのも一考かと

* 年番、非年番

年番と非年番に分け、祭りの挙行の際に交代に先順位をきめ、年番は先順となり「神子舞」を受け持つこととなる。

非年番は後順となり「鹿島踊り」を受け持つ。

祭りの指導権は年番監督がその任にあたり運営される。

* 大宿

五人衆の祭礼における拠点場所であり、借用条件として、前年に不幸がなかったこと、検分における庭で踊りが出来る広さを有することを条件とする。

* 小宿

若い衆等踊り子の拠点場所であり、借用条件として、前年に不幸がなかったこと、そして家の中で踊りの練習が出来る広さと、なにより庭で踊りの出来ることが絶対条件である。(借用期間が長期間となる)と供に神社より山側に位置しないこと。

* 神子宿

神子舞踊りの拠点場所であり、借用条件として、前年に不幸がなかったこと

* 小宿での役付け (三頭とも言われる)

若者頭 → 配下の若い衆を指揮監督する

歌頭 → 祭歌の責任者でもあり、歌の指導にあたる数名の歌世話人を統括する

振付頭 → 踊りの振付の責任者であり、振付、振付見習いを統率し踊りの指導の任に当る

* 小宿での各種ポジション

世話人 → 若い衆は祭りの期間 (概ね2ヶ月も練習も含め神社奉納、後かたづけ) 小宿を拠点とするため、常時宿に詰め若い衆を統率する (南組では何時ごろからか「マネージャーとも呼ばれるようになった) と共に数名の世話人の先頭にたちスムーズな宿の運営に当る重要な役であり、前回の「カンバ振り」がその任に当たることとなっているようだ。

祭りの流れ等を記録し次回の参考にすることもまた責務である。

宿を異にするが、奉納踊りの決定、手足の動きなどの振り付けや踊りを造る踊り世話人、それに付ける歌を選ぶ世話人 (地歌) の構成で運営される (通称「金太楼3階」と言う)

又、年番となった組は「神子舞」を奉納することとなるが、小宿の管轄ではあるものの宿を異にし、若者頭等も自由に行き来できない

一種独特の雰囲気醸し出している（神子と神子舞を参照）

二の手 → 踊り子の中で中堅クラスから選出され全踊りのリーダー。

最前列には新人の踊り子（持ち踊り）が配置されるが万が一にも手順等を間違えることがあっても惑わされることなく踊りを真っ当でできる器量を必要とされ踊り子の憧れのポジションである。

二の手以降押さえまで揃って踊ればよく新人はそれなりの責任はあるものの二の手の責任はさらに大である。

押さえ → 最後尾に位置し最古参の踊り手のポジションであり一般的には股引着用が容認されているが南組では新人踊り子と同様パッチ姿で脛を出して踊ることとしている。

カンバ振り → 看板が訛ったものといわれるが、長さ6メートル程の竹の先端に2メートル程の竹ヒゴに5段に五色の紙花（南組は上カラ紫、赤、黄、白、緑、北組は紫、赤、黄、緑、白）をつけた12本（閏年は13本）箒状のものであり、行列を組むときは先頭に踊り場では自組の看板としての象徴的存在である。

手踊り奉納に際し自組の最初に行われるのが「カンバ振り」で礼儀作法も厳しく、カンバを水平にして持ち、上方に重みがついているカンバを警護の頭上すれすれに一回転させ（警護はカンバが当たりそうになった場合でも決して動くことは許されず）立ち上げ体制を立て直し自組の待つ集団に走りこんでゆく。

男の力量に観衆の喝采が上がり「カンバ男」冥利に尽きる一瞬であり踊り子の願望を独り占めした瞬間である。

呼ばある人 → 踊り子の新人から選ばれ、最前列の中央に位置し（二列に踊るもこの時のみ三人の列となる）所定の場所に全員静止、一步前に進み出て若い衆に向かい「若い衆しっぽ一とらっしゅれよー」と大声で語りかけると、若い衆から声を揃え「よかーろう」と返答し、さらに両者の応酬あり、これが終わると踊りが開始される。

年番は「かんちょろ節」非年番は「花にさくなら」

新人に与えられた特権なので「呼ばある人」に推挙されることは今後の祭りに携わるもやりたくてやれる役ではなく一生誇りにできる大役の一でもある。

これまた作法にうるさく疋屋と呼ばれる祭頭等お偉方鎮座する方に尻を向けることをせず右回りで正面を向き、左回りにて元の位置にて戻りて踊る。

* 踊り子の衣装 → 年番は茶みじん、非年番は藍みじんに各帯を締め（神社より借用するが大変高価な物であり取り扱いについては十分な配慮が必要）センスを帯の間に挟み、豆しぼりの鉢巻、赤や黄色の派手な襷をかけ、白足袋、黒鼻緒のゴム裏草履、パッチ姿の尻パシヨリで脛を出して踊る。

「かんちょろ節」、「花になくなら」の場合は裾を下ろし、鉢巻、襷

をはずし踊る。

(新人達の間ではたすきの多さを競い持てる男を自慢しいこともあったとも聞く)

* 付け祭り → 各組それぞれの奉納踊りが終わった後に、二の手を含み五組ほどで、俗に言う股引着用組が鉢巻、襷がけの尻パシヨリにて踊るも検分抜きにて演ずることができる。

(踊り子にとっては師匠格となる者の手の混んだ踊りである)

* 神子と神子舞 → 年番が奉納するしきたりとなっているので、神子は年番より選出され、七つのお祝いを終えた10歳以下の男児が選ばれていたというが、現在では小学校高学年から中学校低学年の少年が選ばれている。

別名「ミコンジョウロウ」とも呼ばれ、選ばれた家族、親戚にとっては光栄で周囲から祝福されたが、近年は苦痛の多い役と、なり手探しに苦労しているのが現状である(過去に神子を舞った人達曰く「俺の時は三輪車を買ってやるからとか、グローブとバットを買ってやるからなどと言われやったけな」と話しているのを聞いたことがあったような)と聞く。

神子舞を演ずる時は畳ゴザ一枚が敷かれた上で、太鼓と笛に合わせて、両手を水平にのばし、前に進み後ろに退き、手に持った鈴と御幣を振りながら舞うが、ゴザの外へ足を出して舞うなどのものである。

年番の若い衆から「アライー、アライー」「ノッター、ノッター」という掛け声がかかる。

(神子の衣装は、下に赤い長襦袢、上に金糸や銀糸で裾模様を刺繍した縮緬の着物を着て帯をしめ下に赤い帯揚げ、上に黄色い腰紐を結ぶ。頭に数々の飾り物をつけ美しく飾り立てた鬘をかぶり、厚化粧し右手には鈴左手には五色の幣束を持つ。縮緬の着物の色は赤門の時は紫、神社奉納の時は浅黄と決まっており、各々着替えをすることとなっている)

* 鹿島様 → 「神子で開いて(年番)鹿島で納める(非年番)」といわれ、鹿島踊りを奉納して終了となるが、円陣をつくって踊るもので鉢巻、襷をはずし裾も下ろし踊る厳粛な踊りである。

踊り子はすべて襟の背に小さな御幣をさし、円陣の輪の中にオンベという万灯を持つ者(非年番の振付頭)に合わせ踊るのがこの踊りの特徴であり、歌は歌頭一人で歌うのもまた特徴である。

オンベを持った振付頭の口上「氏子ども、氏子ども」と若い衆のかけ合いの後

に開始されるが、年番の踊り子は「渡御式」の際に参加させてもらうこととし、奉納踊りの際は遠慮させて頂くも非年番の若者頭の相談の上

* 検分等 → 南北両組の手踊り、年番の「神子舞」、非年番の「鹿島様」を神社に奉納できるか厳しく点検するもので三箇所の間門が待ち構えている。

小宿の見聞、そして大宿の検分、そして一発勝負の赤門の面談があり、神子舞が作法通り正しく舞えるようになっているか、また、手踊り、鹿島踊りが教えの通り真剣に演じられているかなどを検分し奉納に差し支えなしとの評価を受け神社奉納となる

* カンバ → 南北両組の象徴で、看板の訛ったものといわれている
詳細は「カンバ振り」を参照のこと

* ショウモン → 所望と書くのごとく「アンコール」を意味し、観衆や役付から「五の手がショーモンダー」と声が飛ぶと前から五列目の踊り子が最前列にて踊りを披露することとなる。以前は何回ものショーモンがあったとのことだが、現在では二回までと数を決め行われている

しかし「赤門の面談」の場合は検分の厳正を期するため「ショウモン」は行わず。

* 「御輿渡御」

手踊り終了したのち関係者は神前に集まり年番、非年番の順に正装して並ぶ村内に響き渡る大太鼓の音（打ち手は神子の小太鼓打ちが担当）を合図に、一般村民も連なる長蛇の列は、御輿（通常の御輿と違いもまない、静々と進む）を先頭に粛々として神社の鳥居をくぐり渡御に移る

「下に下に」と叫びながら行列に先行する先払いの声（現在は発声なし）に老若男女は手に手に賽銭や「おさご（餞米）のおひねり（紙包）」を用意して、沿道の両側に土下座して御輿の通過を待つ

二人の妊婦が担いでくる大きな賽銭箱に、手にした「おひねり」を投げ込みながら、続いてくる御輿を仰ぎ「とうちゃーなあ、とうちゃーなあ」といって合唱礼拝する

行列は幟を結ぶ村内の幹道を一巡途中で赤門により宮司は当主と頭殿（足利時代は祭りの司宰者を頭（とう）または頭役と称し、大島では役の敬称にドン（殿）を多く用いていたのでトウドンと称するのだろう）神社内で式を行い、庭園では

祭頭は盃事をおこなう

式終了神子の太鼓の合図で神社に向かい、到着したら御輿を所定の位置に納め担いでくれた人に礼を述べ南北両組は別れ式の場へ

之にて御輿渡御は終了となる（大島志考より）

* 祭礼

1635年（寛永12年）江戸幕府に神社奉行が設置され諸国の社閥の修繕が促されている中、寛永18年には棟札には神主が定められた

神主→神社に仕える人、神官

宮司→神社の最高の神官

この時代すでに祭典が行われていた推測されるが、唄や踊りは後年となったものだろうが、現在おこなわれているものになったのは、江戸時代後期の手法といわれている

文政10年(1827)4町1村の5組にて祭礼の記録あるも、現在は上町神子と、下町鹿島踊り、及び岡田のテコ舞を残すのみ

前記した3踊りについては、昔から格式ある恒例の演技だけに、いまでも演者は正装し、一挙手一投足の所作も極めてやかましく、振り付けられたとうり厳粛に踊る。5組であったものの、明治初年分裂し4組でおこなっていたが、同22年の大火の翌年、初めて消防組が設置され、人口と地域の関係から村内を南北二組に分けの編成に併せ祭礼も南北に分け挙行するようになった。

年番と非年番と隔年で先順位を決め、年番は「神子舞」を非年番「鹿島踊り」とし今日に至っている

* 地歌

歌頭(じがしら)を中心に地謡衆は、当日円陣に座り踊り手を見ず歌う。

踊り手が歌に合わせる。センスを鼻にあて声を散らさないよう歌う。

奉納踊りは次から次へと歌うので歌のはじめに歌ばやし(歌の最後のはやし)を入れる

大唄→昔からの振りを重視し踊り方、歌い方ともゆったりとし、長く難しい

「伊豆の下田」「めでたきもの」他2唄の祝い唄などが上げられる

中唄→中級者用踊り「下じゃ平潟」

かい声唄→威勢良くかいを漕ぐ動作が入る「男伊達」「日和がよければ興津の港」「江差のぼり」等

小唄→花柳界や盛り場の雰囲気を持つ軽快で粋な曲で初心者向け

「梅が枝」「ニガチャン」「オヤマカチャンリン」回り踊りの「沖の大船」「わしと行かぬか大島名所」等がある

* 御輿

御輿の奉獻は安永七年といわれ、すでに祭礼も行われ渡御も行われていたらしいが、手踊り等の記録はないとのこと

平素は神主藤井家(赤門)の奥座敷に隣る場所に納められていたものだが、明治の末期頃に故あって神社屋内に移納されたものである。

詳細については「伊豆大島志考」を参照して頂くこととし、藤井家に納置された頃には、毎年正月15日の早暁に余人を遠ざけ神主(当主)自ら「魂」と称し紅白二個の玉を御輿に入れ、のち、係りの者たちにより付属品と共に神社に運び、その日の有夕方までに組み立て飾り付けを終へ、総代世話人らも神主代理とともに齋戒沐浴し、夜宮と称し御輿の不寝番をなし、一夜を過ごした。

この際翌16日に行なう祭礼進行上の一切の式次、時間割、所望の回数などを最終的に決定した。

祭礼の順序

- 1、 神楽の奏曲、年番の歌謡（じうたい）全員で歌い笛を用いず太鼓の囃子
- 2、 年番の神子舞とナンカズ（かんちよろ節）
- 3、 同 余興の手踊り
- 4、 非年番のナンカズ（花に咲くなら）
- 5、 同 手踊り
- 6、 同 鹿島踊り 非年番の歌頭一人で謡い、笛も太鼓も入らない
- 7、 御輿の渡御

(年番)

巫女舞

一、 ちはやふる
(チーハーヤーフウールー)
天の岩戸を
(アマーノーオーイワトーオー)
おし開き
(オシーヒーラーアーキー)

二、 かぐらを
(カーグーラーオーー)
奏して
(ソーオーシーテーー)
舞い給ふ
(マーイーターモーオー)

「アー太郎そこでしょう」

(年番)

かんちよろ節

「若衆シッポーとらっしやれよう」
(よかーろう)

「なんかずなんよーエー」
(ヤーエンヤはりわきエンエン)

「やんや若衆
これじゃあいくまいわい」
(どーだい)

「何とか一つめでたいことを
やりましょう」
(よかーろーよーおい)

一、 かんちよろ節しゃ どこから
はーやるの江戸の
(サンチョロリンコイ)
吉原のヤーイのーのサエ

女郎の唄の

(ジョーサジョーサ さかやのジョーサ)

二、長いきせろに

長崎煙草のながく

(サンチョロリンコイ)

飲めとのヤーイの一のサイ

色煙草の

(ジョーサジョーサさかやのジョーサ

松坂こーえてよーいやさ

しのぶり若衆エーンエー)

(非年番)

花に咲くなら

「若衆シッポーとらっしやれよう」

(よかーろう)

「なんかずなんよーエー」

(ヤーエンヤはりわさエーンエン)

「やんや若衆

これじゃあいくまいわい」

(どーだい)

「何とか一つめでたいことを

やりましょう」

(よかーろーよーおい)

一、 花に咲くなら

牡丹の花に

(ソレエン ソレエン)

庭に咲いても程がよい

(ソレエン ソレエン)

二、 主は芍薬

あやめの花に

(ソレエン ソレエン)

庭の小菊かかきつばた

(松坂こーえてよーいやさ

シノブリ若衆エーンエー)

(非年番)

鹿島踊

「氏子ども氏子どもコーマイレコーマイレ鹿島様から
目出度いいことがオンジャリ申すわい」
(何んじゃい)

「浜にサバ、カツオがまくり上ると言うオシテだに
よってソーソー急いでミロク踊りをつっぱじめろつっぱじめろ」
(よかーろうよーい)

一、 祝い目出度の
(ソリヤーアー祝アーイ、メンメーデーターンタアノ
枝もいよこの サンサ若松一エー)
(ソリヤーアー枝モサンサーカーユーウンユール
五葉は目出 サンサ葉モーシュンシューゲール)
(ソリヤーアー五葉ワーア、メンメーデーターンタアノ
サンサ若松一エー)

「次が所望だ」
(よかーろうよーい)

二、 五尺いよこの
(ソリヤーアー五尺 テンテーヌーグーングイー
染もいよこの サンサ中ソーンソーメータ)
(ソリヤーアソーメーモ ソンソーメターンターガ
祝い目出度の サンサ中シュンシューボーリー)
(ソリヤーアー祝アーイ、メンメーデーターンタアノ
サンサ若松一エー)

「次が所望だ」
(よかーろうよーい)

三、 橋のいよこの
(ソリヤーアー橋ノ シン下カンカーラ
小ぶないよこの サンサウーノートントーリーガー)
(ソリヤーアーコーブーナ クンクワーエーンエーテ
うれしゅ目 サンサーフーリーシャンシャーリート)
(ソリヤーアーウーレーシューメンメーデーターンターノ
サンサ若松一エー)

実るもヤッコッラヤのヤ
トコよいやさの
主しだいイヤサカズイズイ

(アートコよいやさの主しだいイヤサカズイズイ)

ニ、 ツツジつぼみで恥ずかしけれど
ノーエ (アートントン)

露がかかればヤッコラヤのヤ
トコよいやさの

開きますイヤサカズイズイズイ
(アートコよいやさの開きますイヤサカズイズイ)

三、 いとし殿ごになそせかけられて
ノーエ (アートントン)

とかにやなるまい
ヤッコラヤのヤ
トコよいやさの

のしの帯イヤサカズイズイ
(アートコよいやさの のしの帯イヤサカズイズイ)